宝石のような朝

アキミン

「永遠に幸せな死後の世界は本当に幸せなのでしょうか？」
「え？　死後の世界？」
「ここの人々がよく言うじゃないですか。神を信じて死んだら永遠に幸せな死後の世界、楽園に行けると」
　世界はまもなく滅亡する。
　一ヵ月後、地球には隕石が落ち、この世にいる人間を含むほとんどの生命体はそのまま絶滅することになる。
　この驚くべきニュースは、市民のパニックを防ぐために長い間秘密扱いされていたが、隕石に対する世界各国の対応がすべて失敗した後、自分は良心がある人だと自負する何人かの人間によって世間に知られるようになった。

　このため、世界は大混乱に陥ってしまった。
　多くの公共機関が停止し犯罪率が上昇した。神を信じなかった多くの人が宗教を持ち始め、自分が死んでから死後の世界を通じて永遠性を約束して貰おうとした。
　子供がした質問はこれと関連があるだろう。
「楽園か。本当に行けたらいいな」
「おじさんも楽園に行きたいから今の仕事をしているんですか」
「そんな訳ないだろ」
　地球滅亡のニュースが世間に知らされてから数か月。私は安全と平和のため新興宗教に身を委ね、彼らが管理するこの地域に来ることになった。
　外の人々は「どうせ地球が滅亡するのに何の意味もない」という考えで人生を諦める人も多かったが、私はそうではなかった。
　現在私がしていることは原発で災害が起きないように管理することだ。まもなく世界が滅亡するから、私も仕事なんか辞めて思いっきり遊びたいと思うが、私がしている仕事はそのような気持ちで辞めれば、即座に世界が滅亡してしまう。
　もし私たちが他の人のように地球が滅亡するから仕事なんか放っておいたら、隕石が落ちる前に地球は滅亡しただろう。私たちのような人々が地味に働いているので、まだ地球は滅亡していないのである。
　たとえ明日、世界が滅びても今日、僕はリンゴの木を植えるという雄大な考えではなかった。外があまりにも散々だから仕方なくした選択だ。
　滅亡が一ヵ月後に迫った今、いくつかの地域を除いては強盗と殺人のような犯罪が日常のように起きている。環境的な災害はおまけだ。
「君も私がどうしてここに来たのかはもう知っているじゃないか。私の身の安全のためだけだ。私は死後の世界もここで言う楽園も信じない」
「でも、もし本当に永遠に幸せな楽園があったら行きたいんですよね？　苦しみも悲しみもないそんな所」
「そうだね」
　多くの人が望むはずだ。毎日幸せに過ごしたい。私を苦しめるすべての要素がなくなって欲しい。永遠に幸せにいられる楽園が本当にあれば、そこに行きたい。
　当然ではないか。私はどうして子供がこんなことを聞くのか理解できなかった。
「でもそれは本当に人間だと言えるでしょうか」
「うん？」
「楽園に行けば永遠に幸せになるしかないじゃないですか」
「それがどうしたの？」
「一度考えてみてください。楽園に行った人間は永遠に

幸せです。それでは他の感情はどうなるのですか。負の感情を奪われるのではないでしょうか」

楽園に行った人間は毎日が幸せだ。その毎日に何が起きるかは分からないが、とにかくいつも幸せを感じて自分を苦しめる問題が一つもない。それなら、人間の怒りと悲しみのような負の感情を感じることもできなくなる。

負の感情を感じない人間。それは果たして人間と呼べる存在だろうか。

子供が言いたいことは多分こんなことだろう。

「私たちは感情が欠乏した人間を正常ではないと言うじゃないですか。じゃあ、楽園に行った人間も楽園に行きたがっている人も正常ではないのかもしれません」

「そうかな？」

「やっぱりおじさんは正常ではないですね。いい意味で。まあ、こんな主観的な話なんかおじさんは気にしないだろうけど」

ただ幸せに暮らしたいという考えが悪いわけではないと思うけど。子供は考え方が変わったようだ。この子はいつもそうだった。どこか普通の人とは違う考えをよくし、私にその考えを話してきた。

「死んでから楽園に行った人間は人間じゃなくなるので、私はちょっと怖いです。今までの私じゃない他の存在になってしまうんじゃないですか」

「なるほど。他の存在になるのが怖いのか。それじゃあ、新しい姿に進化したと思ったらどう？　どんな状況でも幸せだけを感じられるように進化したのさ」

「フフッ。では麻薬をする人間は私たちより進化した人間ですね」

「……それはちょっと違う話だと思うんだけど」

現在、外では麻薬をする人間が非常に多くなっている。麻薬の取り締まりなんかされていないので、麻薬が広まるのを防げなかった。どうせ世の中が滅亡するから、その前まで幸せな感情だけを感じて世を去ろうとする人々と滅亡前に自殺しようとする人々が麻薬に陥るのは当然なことかもしれない。

楽園に行きたいという欲望で集まったここの人たちも麻薬をしている場合が多い。もちろん麻薬をする人が増えれば増えるほど地域に様々な問題が生じるので最大限統制しようとしているが仕方ないことだ。

「もしかしたら楽園は近いところにあるかもしれませんね。その楽園は永遠ではなさそうですが」

「そういえば麻薬は脳の構造と機能を変えることもできるそうだよ。君のその恐ろしさの答えが麻薬かもね。脳の構造と機能が変われば、それは別の存在になるのではないかな？　麻薬をやってみて、君が他の存在になったと思われるか試してみるのはどう」

「それは自分の意志で変化するんじゃないですか。自分の意志で変化を選択して変わるのと、自分の意志とは関係なく変わるのは大きな違いがあります」

自分の意志に変わることと、自分の意志とは関係なく変わることにどんな違いがあるのか。私は利口な人間ではないからよく分からない。

その後もしばらく子供は自分の考えを私に話し、私は子供が喜ぶような返事を苦心しながら会話を続けた。話を全部終えたのか子供は心地いい顔で部屋の扉に歩いて行った。私は帰ろうとする子供に小さなプレゼントを握らせた。

「何ですか、これは？」

「麻薬だよ。もし気になるならやってみろ。役に立つかも」

「でもおじさんはやらないんじゃないですか」

「私も滅亡の前日にはやってみようと思っている。やり方は分かるよね？」

注射はまだ子供には怖いかもしれないのでパウダー系にした。子供は分かったと頷いてプレゼントをポケットに入れた。

「確かに私は気になるのは確かめてみたいからありがたいプレゼントです」

「その性格は多分いつか君を傷つけるよ」

「そうかもしれないですね。でも私は傷ついてももっと色んなことを知りたいです」

知らぬが仏という言葉を心の底から共感している私には理解できない思考方式だが、それがこの子の生き方なら尊重せねばならない。

私は子供にプレゼントをばれないように注意してから手を振った。しかし、子供にはまだ言いたいことが残っているようだった。

「おじさんは私にとって本当にいい人です」

「なんで？」

「普通の人々は自分と考えが違う人を嫌悪するからです。おじさんのように私の話を聞いてくれる人は初めてみました。普通は私の考えが間違っているとか変だとか言いながら叱ったから」

「そうかな」

「それでは帰ります」

子供は笑いながら挨拶した。

そして翌日、私はある噂を聞いた。

昨日子供が父親を刃物で刺して、今は部屋に監禁され

ているという噂を。
多くの人がこの知らせを聞いて驚いた。当然驚くしかなかっただろう。子供は普段から明るくて周辺の人々にも優しく接していたし、何よりも子供の父親がこの地域を管理する教主だったので、ここの住民たちは想像もできなかったに違いない。
「教主様が無事で本当に幸いです」
「そんな子じゃないのに、どうしてだろう。何か事情があったんでしょうね？」
住民たちが交わす会話はほとんどこのような感じだった。皆がこのことについて騒いで、彼らなりになぜこのようなことが起こったのかについて推測していた。
一つの事件だからただ一つの事実のみがあるべきだが、人々の話を聞いてみれば全くそうではない。
あれこれ推測と想像を吐き出す人々は、互いに自分の言葉が正しいと声を高め、相手の言葉は話にならないと怒る。
職場でもやはり今回の事件は大きな話題のようだった。
「使徒様もやはり事故だと思いますか。使徒様だから自分たちよりは預言者様のお子様をよくご存知じゃないですか」
「おい、聞かなくても事故だってば」
「ああ、僕が聞いた話では預言者様が家で礼拝をしていた時、お子様が礼式のナイフを渡す途中に転んで事故が起きたと聞いたよ」
「俺は真実を知りたいんだぞ」
私が出勤するやいなや何人かが私に近づいてきてそのように騒いだ。
私はここに来てから、色々あって使徒という職責を引き受けることになった。そして預言者は教主の職責である。
今回の事件の詳しい内幕を知りたがっている人たちが私の周辺に集まったが、私に言えることはなかった。
どうして私にそんなこと聞くのだろう。この人たちの目に使徒という職責は何か権威があり、さらに情報を得ることができるそのような席であるように見えるのか。
重要な地位にある使徒たちは確かに職責を利用して様々な恩恵を受けている。私も使徒という職責を得てから普通の住民より受け取るものは少し多くなったが、私には使徒という職責を利用して他の住民より情報を多く得る権限も権利もないししたくもない。
私はただ管理者であるだけだから。
「さあ、私はそういうことはよく分からないから、みんな静かに仕事に戻りましょう」
私の話に人々は不満そうにざわめきながら散らかった。ざわめく人々の話を聞いてみれば、私たちのような使徒たちは何かを知っているに違いないが、自分たちだけで情報を共有しているという不満である。
今まで多くの事件があってその度、私が本当に何も知らないと何度も言っても人々は信じなかった。彼らの目には私も他の使徒も同じに見えるから。彼らにはそれが真実なのだ。
「お疲れ様でした。私に伝えられた情報によると、昨日のことは事故が確実なので、皆さんは今まで通り生業に従事してください」
一日の仕事を終えた私は指令に従い従業員全員にそう伝えた。さて、どうしよう。子供に会いに行った方がいいかな。今の状態で子供が私の家に訪れることはどうしても無理でしょう。
最初は自分の部屋に監禁されていたと聞いたが、私が働いている間、子供は刑務所に場所を移したようだった。
教主は「いくら事故だとしても本当に危険な状況だったから反省のために厳しく処罰しなければならない」と述べ、子供を数日間刑務所にいるように措置を取ったという。
面会申請をしてしばらく待った後、私は囚人服を着て座っている子供を見ることができた。
「来てくれましたね、おじさん？　もしかしたら来ないかもしれないと思ったけど良かった」
「表情があまりよくないな」
「こんなところにいるから当然です。服の感触も嫌だし」
隣に刑務官の役割をする人がいたが、本当の刑務官ではない。
子供と対話をしている途中何か一般的じゃない話でも外に広がったら教主の威信と名誉に大きく罅が入ってしまうので、教主の親戚の一人である第三使徒が教導官の役割をするのである。
「外ではすごく騒いでいるでしょう？」
「そうだね。私の仕事先でも、私にあれこれ聞こうと来たぞ」
「おじさんの性格なら何も言わなかったですよね」
「まあね」
さっきの質問で私がどんな事実を言ったとしても、人々は勝手に自分だけの真実を考えるはずだ。聞きたいことだけ聞いて、考えたいことだけ考えるのが人間だから。
「どうせそこで働く人たちは、おじさんが何を言っても、かえっておじさんが変なことを言うと言ったに違いないです」
「そうだと思って何も言わなかった。みんな事故だとば

かり言っていたな」

「そこには忠誠心の高い人間だけが配置されているのだから。火を見るよりも明らかです」

子供は退屈な表情で頬杖をついたままため息した。

原子力発電所のような危険で災害が起こりうる場所は、安全のため特に宗教に心酔している人々が勤務している。

したがって、そこにいる人たちがより一層今回の事件で偏向した判断をしただろうと子供は確信しているようだった。

人が何かを判断する時に必要なのは知識と経験のような情報だけでなく状況と雰囲気など多様である。

判断をするのはいつも自分自身であり、ゆえに人は自分がした判断がいつも正しいと確信する傾向があり、間違わないで欲しいと考える。

そのため、明らかに自分の判断が周辺と違う時その判断が正しいか間違っているかはともかく、意地を張ったり自分が正しいと大声を出し、さらには怒ることもある。

そして、誰もその言葉に共感せず、皆がおかしいなものを見たように視線を送る時、ようやく納得がいかなくても頷いたりする。

そのような経験を何度も繰り返すと、自分の考えが周りと違っても静かになる。自分が本当に正しいことを思っているのか、おかしな勘違いをしているのではないか、紛らわしくなるのだ。

私もそのような経験をしてからは何が正しいのかについて熱心に論争したい気持ちが消え、無駄に力を抜いたくなくなった。

発電所にはほとんどの人間が預言者の言葉に深くはまっているので、私が他の考えを持っていてもそれを外に出したら面倒になったに違いない。

「本当に人というのは不思議です。それでも地球は回るじゃないですか」

「君はもっと君の考えを筋道立てて話す方法を学ぶ必要がある」

「おじさんは理解してくれるじゃないですか」

子供が言いたいことを簡単に言えば、結局発電所の人間たちが言った判断は間違っているということだ。

人々がいくら今回の事件は事故だと言ってもこの件は絶対事故ではなく、子供が意志を持って行動した結果起きるしかなかった事件だったということである。

子供とガリレイの違いは、ガリレイは多くの人に嫌われたが、この子は憎しみの代わりに理解と共感を得ているのだろうか。

「おじさんと私が本格的に話した日のこと覚えていますか？」

「大体は、判断に関する話をしたと思うけど」

当時、おそらくこのような話を適当にした。

人間の判断というものは結局、常に正確なものではない。時には誤った判断、すなわち錯覚する場合も多く、時にはその錯覚を長い間信じる場合もある。

長く信じた錯覚は恐ろしくも信頼と信念になりいつの間にか真実になってしまう。そして、最も恐ろしいことは錯覚だと気づかず、信頼と信念になった真実を他人にまで強要することだ。

自分は今までこのように生きてきたけど何の問題もなく元気に暮らしている。自分は今までこのように生きてきたので、あなたも豊かに生きるためにはこのように生きなければならない。

問題は、そのような恐ろしい人がこの世にはあまりにも多いということである。そして社会で生きていく多くの人々は、そのような人々に合わせるために、その錯覚に従って行動しなければならない。そうでなければ普通じゃないから。そして、そうするうちにいつの間にか人々はその恐ろしい人たちの一人になるのである。

「私は私の話を聞いてくれて、たまに私が知らなかった事実を知らせてくれるおじさんが気に入りました」

「そう？よかったな」

「私は数学という学問は完全な学問だという錯覚を絶対的な真実だと思っていました」

思い出した。その時、子供は数学という学問はいつも明快に答えが出て、世の中のすべてを説明できると主張した。

そして私は「我々は知らねばならない、我々は知るだろう」という数学者ヒルベルトの言葉を言ってくれた。

子供はヒルベルトの言葉を聞いてとても喜んだ。やはり数学は完全な学問であり、私たちは数学を通じて世の中のすべてを知ることができるようになるだろうと。

その次に私はゲーデルの不完全性の定理について説明し、数学には大きな穴が存在する不完全な学問という言葉を追加した。

それを聞いて子供は相当な癇癪を起こした。

「この世に真実などない。あるのは事実だけ。ところが人々はその単純な事実に色々と肉付け、各自の真実を作り出す。そして、その真実は新しい事実が現れれば、もしかしたらこれ以上真実ではなくなるかもしれない。だからこそ真実などなく事実だけがあるのだ。おじさんがその後に言いましたよね」

「私がそんなに恥ずかしいことを言ったと？　要約しすぎだぞ。」

確かに似たニュアンスで話したが、あまりにも要約し

すぎた。その時の会話は次の通りである。
　あなたは裁判官で殺人者Aと被害者Bがいるとしよう。この情報だけで法廷で罪を判断する時、多くの人が一旦殺人者Aを罰する判決を下すだろう。
　それでは情報を追加しよう。実は、BはAを殺害しようとしたが、Aの反撃で命を落としてしまった。それでAが殺人鬼になったのである。それなら、裁判官になった人々は、最初の判決を覆し、それぞれの価値判断で判決を下そうとするはずだ。
　ある人は正当防衛だとして無罪判決を与えようとするだろうし、ある人はそれでも殺人だとして有罪判決を下すだろう。
　それから、もう一つの情報を追加してみよう。実は殺人者AはBの家族の一人を過去に殺したことがある。この事実を知れば、正当防衛だと無罪判決を与えようとした人も、少し躊躇うことになるかもしれない。
　人が何かを判断する時に必要なのは様々だが、それでも最も重要なのはやはり情報なのだ。
　新しい事実が現れる度に判断ということは変わることもありうる。しかし、世の中を生きていれば新しい事実というのはそれほど簡単に現れるものでもなく、誰かが自分に来て教えてあげようともしない。
　そもそも知ろうとする努力もしないかも知れないし、運が良くて新しい事実を知っても、すでに真実になってしまった錯覚のせいで事実を拒否したり、または状況と雰囲気のために錯覚を変えることができない場合も多い。
「おじさん。私はおじさんとこうやって話すために取引をしました」
「そうか？」
　取引か。
　この子が賭けられるほどの札はなかったはずなのに、一体どんな方法を使ったのかすごく気になる。
「取引といっても、私がかけられるものは大したことないです。どうして教主を刺したのかという動機。おじさんがもし面会に来たら知らせてくれると教主に言いました。面会に来なかったら言わないし、無理に来させるのは絶対にダメだとも。もしかして無理に来たのではないでしょうね？」
「そんなはずが。私は来たいから来たんだ」
「なぜですか？」
　そうだね。なぜだろうか。
　子供と会話する時間が楽しかったからかな。確かに面白かった。子供と会ってから数ヶ月間、子供は平凡な人が考えないことを考えて新しい観点の話をする時が多かった。
　私は子供の言うことが正しいかどうかは判断しようとはしなかった。そもそもこの世に絶対的に正しいことも絶対的に悪いこともないと思ったからである。
　それで、ずっと会っていたのかもしれない。そのように会うのが多くなり情が湧いて見たいと思うようになったのか。
　そんなはずがない。
「私たちはかなり深い友情を分かち合ったじゃないか。教主様をどう殺すかについて一生懸命考えたりもしたし」
「……教主はいくら客観的に考えてみても死んで当然な奴ですから」
　教主は預言者という名を掲げて、この地域で自分の好きなように行動している。地域社会の安定という名で、もともとこの地域に住んでいた反抗的な住民を無差別に虐殺し、人々を供物という名で自分に捧げさせた後、部下たちと性的暴行を加えた。
　その他にも数多くの罪を犯し、今後も犯す人間が教主という人間像である。確かに社会という枠組みから見れば教主は更生不可能な犯罪者だ。
「まあ、そういう人が死んでも当然な奴だろう」
　それでも教主に悪い点だけがあるわけではない。教主は自分の言うことをよく聞いて従う者に恩恵を与え、預言者という名前を名乗り宗教を作った。
　ここまでは誰でもできることだとも考えられる。
　しかし、数ヵ月間、成功的に地域を管理し、自分の宗教を浸透させることは、とんでもない手腕がないと不可能なことだ。
　教主がヤクザと一部の軍人たちと結託し、宗教を利用して自分の権力を安定的に維持しながら地域を管理していたため、私もここに来ることになったのである。
「おじさんが言った通りにしたら、そのゴミは確実に死んだはずなのに」
「でもいいお父さんじゃなかった？　君にはとてもよくしてくれたじゃないか」
「……急にそんなこと言わないでください」
　子供が自分の父親をゴミだと言うのも、私が良い父親だと言うのも結局主観的にならざるを得ない真実に過ぎない。
　教主が地域社会の安定のために人を虐殺し、性的暴行を加えたという事実を悪く思うかどうかによって、教主の評価は変わる。
　ジンギスカンが征服のために人を虐殺し、性的暴行を加えた行為が、ある人には英雄的な行動であり、ある人には狂人の行動であるかのように。
　同じように教主が子供に無条件的によくしてくれたこ

とも、そのように甘えた結果子供が父親を刺したことも、ある人にはそのように愛を与えて育てたのに破倫を犯した子供の過ちだと言うだろうし、ある人は最初からそのように教育をしたことが誤りだと話すだろう。

「おじさん、私は〈無知は罪〉という言葉を嫌悪します」

「その言葉を聞くと、すべての子供たちが罪を持っているように聞こえてイライラするとか言ったよな」

人間という生物は、自分も知らないうちに無神経な言葉を吐き出すこともあり、無意識に他人を傷つける可能性のある生物だ。

子供は、人が無意識に他人を傷つけることが罪になることはないが、他人を傷つける行為が何かを知ろうとしないのは罪だと考えた。

それで子供は〈無知は罪ではない〉と言いながら、代わりに無知を知ろうとしないのが罪だと主張したのである。

「刑務官役で来たこの人、誰なのか分かりますよね？　そして、お互いにかなり親密な仲ですか」

「第三使徒様だよ。いろいろと私の生活の便宜を図ってくださる良い人だ」

「だからいきなり教主の話を持ち出せたのか」

子供は呆然とした表情でため息をついた。そばでじっと私たちの会話を聞いている教主の人の前で、教主を殺す計画とか死んで当然な奴とか不気味な話をするのは常識的に話にならない。

当然、第三使徒と私が味方なので、このような話ができるのである。

「叔父さん。いや、第三使徒。おじさんは最初からあなたが送ったんですか。私が教主を殺すように？」

「そんな。私たちを過大評価するな。第三使徒様は私と君が楽しく話し合うのを見て私に機会をくださった。君は最初から教主を気に入らないと考えたから何か事件を起こす確率は高かった。だから、少しでもその事件を物騒なものに変えようと頑張ってみたぞ。私は君に真実はないみたいな少しずつ君の価値判断を曇らせるような言葉を言ってみたに過ぎないけど。運が良かった」

何が正しいことか、何が誤ったことか、私は愚かで判断できない。

この子にも同じようにこんな話を続けてくれた。馬鹿な私は判断できないが、あなたは判断できると。

自信に満ちて私に自分の持論をあれこれ並べる子供にとって、そんな話はかなり刺激的だっただろう。

その上、子供の背景も背景であるだけに、もしかしたら世の中が自分を中心に回っていると考えていたのではないか。

「君が教主を殺したら、仕事がずっと楽になったのに。しょうがないな。そのくらいで十分だったし」

「……もう一度聞きます。どうして面会しに来ましたか」

「うーん。……単なる冥途の土産だよ」

「やっぱりおじさんは良い人ですね。冥途の土産もしてくださるなんて」

子供はあきらめた表情で頭を下げた。裏切られた気持ちにでもなったのか。

常識的に私が良い人だったら、いくら世の中が滅亡する状況だとしても子供に麻薬は与えなかっただろう。

良い大人なら滅亡を目前にした状況でも、麻薬の代わりに子供に夢と希望が溢れる話をしてくれたのではないか。

「君には二つの選択肢がある。君がしてくれてもいいし、してくれなくても何の問題もない選択肢だ」

一つ目は教主が偽りの預言者だったという言葉と教主の実体を証言して死ぬこと。

二つ目はただ死ぬこと。

「おじさんたちは教主が病院にいる間、クーデターでも起こすつもりのようですね。教主の統制力が弱まった今が適期ですから」

「そうだね。それでどっちを選ぶ？　個人的に一番目を推薦するよ。私のプレゼントで痛くないように死ぬことができるから」

「三使徒はきっとおじさんも捨てます」

「心配してくれてありがとう。でも余計なお世話だ」

子供が二番目の選択肢を選ぶと三使徒が新しい預言者として活動するのがもう少し難しくなる。そもそも教主が預言者という言葉を熱心に信じる人はそれほど多くないが、それでもこのような証言があるのとないのは大きな違いがある。

「どうして三使徒なんかと手を組んだんですか」

「そうだね。私が最後まで楽に生きるために？」

「そうですか。じゃ、今からでも私の手を握るのはどうですか？」

子供はうつむいた顔を上げずに小さく述べた。声には力がないことが、私が断ることを知っているようだった。

もうすぐ子供に残るものは何もなくなる。教主はクーデターによって死ぬことになり、この地域のすべての権力は三使徒に渡ることになる。

そのような状況で、自分の手を握れというのはどんな自信で吐き出したのか。人間の薄い情という感情を信じて最後の希望を絞り出したのだろう。

馬鹿な私は善悪とか正否とかそんな無駄な判断なんてあきらめて久しい。私の判断が私に利益に戻るかどうか

の判断だけをするのも私には手に余るから。

「はぁ、世の中が早く滅亡したらいいですね」

「その願い早く叶えるよ。もう一ヶ月も残ってないから」

「一ヶ月も残っていないのに王様のように過ごしたいのですか」

「一ヶ月も残ってないから王様のように過ごしてみるのも悪くないかもしれないな」

　私はそう言って席を立った。どんな選択肢を選ぶかはまだ聞いていないけど、どんな選択をするかは大体予想できたから。もう二度と会わないだろうし、会いたくても会えない子供に私は最後の挨拶をした。

「さようなら。君と会話するのは本当に楽しかった」

「よかったです。おじさん、最後に質問があります」

　最後の質問という言葉に私はまた子供に背を向けた。子供は少し赤くなった目でまっすぐ私を眺めていた。

「隕石は私たちが寝ている夜明けに落ちると言うじゃないですか。もしかすると奇跡が起きて一ヶ月以内に新しい科学技術が登場して……。……もしかしたら隕石を破壊することもあるのではないでしょうか……。人々が朝起きると小さな隕石が地球に落ちる光景を見ることになるのです」

「そうだな。でも悪いけど、私は奇跡なんか信じない。じゃあ、本当にさようなら。君と一緒に過ごした数ヶ月間は楽しかったよ」

「……私も楽しかったです。おじさんがくれたプレゼントは最後まで大事にします。さようなら」

　これで本当に終わりだと思ったのか、子供は涙を隠さなかった。大声で泣く子供を後にして、私は外に出た。

　外はかなり暗かったので、夜空の星がよく見えた。あの星の間に地球の運命を変え、滅亡をもたらすその隕石があるのか。

　これから一ヵ月間、何が起こるか。星を見ながらしばらく考えた私はふと呟いた。

「朝、隕石の残骸が落ちる光景か」

　それはまるで宝石のような朝になるだろう。